

鎮魂の賦

回想録

柏倉正二



はじめに

七十五年にも余る私の人生は、全く、波瀾万丈でした。

満州開拓を志した第一の人生、現地入隊し、二年間におよぶ軍隊勤務の第二の人生、終戦後二年間シベリアに抑留され、生死の極限に置かれた第三の人生、そして、再び開拓を志して利根の河原に鋤をふるう第四の人生と、大きな山川を越えて来ました。

これらの波乱は、自ら求めたものではありません。しかし、私に与えられた運命として、真正面から取り組み、誠実に務めを果して来たつもりです。

近年、「回想録」あるいは「自分史」の出版ブームのようです。私はこの種の回想録は、多くの場合、自己弁護や誇張、そして自己満足に陥りやすいものであることを承知しています。私はそれ故に、これまで出版を否定してきました。

我孫子における村づくりも、ようやく一段落し、精神的にも多少余裕が出て来る

と、無性に父母のことが思い出されるものです。ふり返ってみると、奉天における父母の非業の死は一大痛恨事でした。父の渡満時における、故郷を捨てて海外移住を志した決断も子供達の将来の為、そして奉天における決別も残された多くの子供達の行末を思う時、断腸の思いであったことでしょう。今はの際の、親は無くても子は育つ。これが最期の言葉だったといえます。

幸いに、私達は皆んなそれぞれに、苦難を乗り越えて幸福な家庭を築いています。これもひとえに、亡き父母の御加護の賜と信じています。この事実を父母の墓前に報告する義務があるのではないのでしょうか。常に、子供達の将来のことを案じつつ、無念の涙を飲んだ父母の胸中を思う時、私の胸ははりさける思いです。

それ故に、私の辿って来た足跡と弟妹達の現状を、鎮魂の意味を含めて墓前に捧げることが思い至ったのです。何ぶん、六十年もの歳月に、日誌やメモ類は全くなく、わずかな記憶を呼び起して筆を進めました。書き残すべき記録は十分の一にも満たないものですが、ようやく出版の運びになったことは誠に感無量です。

鎮魂の賦 回想録 目次

少年期	6
渡満の決意	8
満州開拓	11
・施設	
・女子義勇軍開設	
・小学校	
・青年学校開設	
・開田稲作	
・用材燃料の切り出し	
・木炭運搬	
・野鹿(のろ)撃ち	
・魚取り	
・雉獲り	
・狼の群れ	
・赤大根収穫	
現地入隊	25
シベリア抑留	33
・満州におけるソ連の戦利品	36

祖国の土

利根の開拓

母の思い出

余生を生きる

忘れ得ぬ人々

・兄、柏倉二郎 ・齋藤省司先生 ・田中孫平先生 ・秋谷幸治先生

・齋藤一夫先生

私の兄弟

・長女 まさ子 ・二女 ゆり子 ・三女 綾子 ・三男 正

おわりに

「鎮魂の賦」の重さ 柏倉利明

37

39

42

43

44

46

49

50

少年期

私は大正十三年、出羽三山霊峰月山の麓、村山盆地の中心地、高掬村に生まれました。朝な夕な迎ぎ見る月山は、故郷のシンボルであったようです。大正六年四月、高掬尋常高等小学校に入学しました。全校生徒数千百名、一クラス五十名で三クラスなので、近村の中でも大きな村だったようです。少年期は身体が弱く、医務室で肝油を飲まされていたことを思い出します。あまり勉強もせず、魚獲り、凧上げ、独楽廻し等、遊び廻っていたようです。その頃の子供達は皆自由に遊び廻り、今の子供たちは可哀想です。

在学中で一番印象に残っている先生は、小学校六年、高小一年二年と三年間教わった斎藤省司先生です。字が上手で、慈愛ある先生でした。

私の村は、近村にない大地主の多い村で、地主の子供等は洋服を着て、カバンをさ

げ、ズック靴を履いて通学するのに、残念ながら私の家は小作農、つきはぎの着物に風呂敷を背負って、草履ばきでした。特に、残念だったのは、小六から中学校に進学する人がいることでした。一クラスから五名位だったようです。小作農の私の家では、当然、進学は思いもよらず、くやしい思いをしたことが忘れられません。ちなみに私は八年間、まがりなりにも首席を通して来たので、特に感じたのかも知れません。

昭和十二年に支那事変が起り、十三年頃は村の在郷軍人がぼつぼつ出征して行きました。実家の一ツ前の五十嵐精二さんが出征する時の様子が、今でも鮮明に覚えています。「祝出征五十嵐精二君」と書いた幟を何本も立てて部落の方々全員、そして小学校高学年二百名位が、手に手に日の丸の小旗を打ちふり、一軒の道のりを御社八幡神社まで行進するのです。

「天に代りて不義を討つ、忠勇無双の我が兵は、歓呼の聲に送られて、今ぞ出で立つ父母の国、勝たずば生きて帰らじと、誓つ心の勇ましさを……」

大きな声で軍歌を歌いながら行進する姿は、本当に勇壮なものでした。私は小学校の旗手の役目でした。校旗は意外に重く、往復四軒の道のりはかなりの重荷だったよ

うです。

御社八幡神社において壮行式、戦勝と武運長久を祈願するのです。一年で五・六回はあったでしょうか。南京陥落の提灯行列もやりました。当時は国内をあげて軍事一色だったようです。

渡満の決意

前にも書いた通り、大地主の下に小作農あり、我が家は小作農、当時、一反歩当り収量六俵半です。借賃として三俵位地主に納入しなければならず、残りの三俵にて生活しなければなりません。勿論、他に夏場の養蚕の収入、冬期間の藁仕事、草履作り、蓑作り等の収入は若干ありましたが、耕作面積八反歩余の小作農の収入は微々たるものです。

当然、その生活は苦しく、祖父母、父母、兄弟六人の大家族は、その日その日の主食にも事欠き、白い御飯は食べられず、大根、葉物、大豆等を混入し、量を増やさねばなりません。土地の持たない農民の悲哀をいやというほど見せつけられた父母の胸中はいかばかりであったでしょう。

徳川幕府からの度々の農民一揆、後年の二・二六事件等の根底には、不合理な社会制度への不満が原因といわれています。昔から農民は、異常な程の土地に対する執着心を持っています。現在もなお、兼業農家が全農家数の七割を占めている現状です。

当時においては、東北地方には他産業は皆無に等しく、総べて米が経済を左右する時代でした。従って、子作農の子弟は、男は下男、女は女中として年期奉公が常で、欧米の奴隷制度そのままに、永久に下積みの生活を決定づけられていたのです。

高小二年の初めの頃の担任の斎藤先生は、いたく私の将来を心配され、農家の子弟の進路は学校の先生以外に活路はないと父を説得し、私も師範学校受験の勉強を始めました。

昭和六年の満州事変の結果、建国された満州国の育成は、日本にとって至上命令でした。明治三十七・八年、自存独立のため、日本が帝制ロシアを敵として満州の荒野

で戦い、十万もの戦死者と二十億円の国費を遣って、ようやく辛勝しました。

その権益は、 関東州の租借権、 南滿鐵道の経営権、 安奉鐵道の経営権、 鉞山採掘森林伐採権、 鐵道守備駐屯権等でした。

昭和四年、滿鉄總裁松岡洋右が、滿蒙は日本の生命線である」とぶち上げました。そして、昭和十一年、広田内閣が国策として決定した二十カ年百万戸移民計画です。この背景には、北の脅威に対する武装移民の配置、農家二三男の土地なき農民の対策、そして食料増産の一石三鳥の構想です。

昭和十三年、土地なき農民の悲哀と子供達の将来を考え抜いた父は、当然、滿州移民こそ現状脱却の道だと信じるようになったのは当然でした。これに対して、母は猛反対だったようでした。何十年も住みなれた故郷を捨てて、見知らぬ他国に移り住む。これは清水寺の舞台から飛び下りるような一大決心だったのでしょうか。

母の反対にあっただけれど、父は拡大な滿州の大地に二十町歩の大規模農業の実現の夢は、益々ふくらんで行ったようです。運命の糸はまだ続いていたのでしょう。

ここに強力な助っ人が現われました。近所に住む本間三代次氏といい、彼は父と同年代で小作農、頭腦明晰で弁舌さわやか。氏は毎日のように家に来てはばやくので

す。「コンバカキユサ、コンバカキユサ(ばからしい)」。二人は困窮打開の道にすぎり、意気統合したようです。「運(うん)とは運はこ(こ)ぶなり、運ばざれば運なし」。そして、いやがる母を説得し、渡満の決意を固めたのでした。

時に、昭和十三年の春のことでした。

満州開拓

本間三代治氏と共に渡満した父源四郎は、現地にての家族受入れ体制準備の後、昭和十四年三月、家族招致のため帰国しました。

実家は祖父母と義兄が守るようになりました。父は大御村成安からの入婿で、兄が出生後入籍。従って、私が戸籍上の長男になっています。父源四郎、母イシ、私十四才、妹まさ子十二才、二女ゆり子十才、二男正己八才、三男正〇才、三女綾子一才。

いよいよ満州へ出発する日が来ました。二月半ば残雪を踏みしめて同級生一同、漆山駅まで見送りに来てくれました。「元気でな」「君も元気で」。送る者と送られる者共に学び共に遊んだあの顔この顔。それはつらい別れでした。

「石をもて追われる」とし故郷を出でし悲しみ……」啄木の歌そのままに、しかし、月山の霊峰はそのままの姿でした。

新潟港を出港し清津港着。汽車にて北上し斐徳駅下車。これより車にて北上五里、我等の開拓地に向います。東安省密山県北五道崗山形村開拓団末広屯です。

「手に握る此の黒土ぞ黒土ぞ

我等立ちたり北五道崗」

完達山脈の麓、飄々と広がる処女地に月山神社を奉戴し、希望に満ちた開拓の第一歩を踏み出したのです。山形屯総戸数二七〇戸、人口九五〇名。私の部落、末広屯は戸数二十七戸、耕地面積二七〇町、二十才台の青年が大半で年配者は三名のみでした。我が家と共に開拓を志した本間三代治氏は、家族招致に帰国せしも、再び渡満することができませんでした。年老いた祖母が不承知のため、涙を飲んで諦めたのです（後談になります）。昭和二十二年八月、私がシベリアから復員した時、本間さんは

私の前に両手をつき、謝ったのです。

「君のお父さんには本当に申し訳ない。共に志を同じくして渡満したのに、私だけが約束を破り、のうのうと生き永らえている。なんとお詫びしてよいやら……」

「どうぞお手をお上げください。すべては運命と思っている。日本全国民が受けた深い傷痕なのだから」

二人でただ泣くのみでした。

いよいよ共同経営の建設工事が始まります。

個人住宅建設班 レンガ造り二戸続き十三棟

柏倉 幸雄(班長) 武田 栄三郎

秋場 留蔵 山口 清吉

農耕班

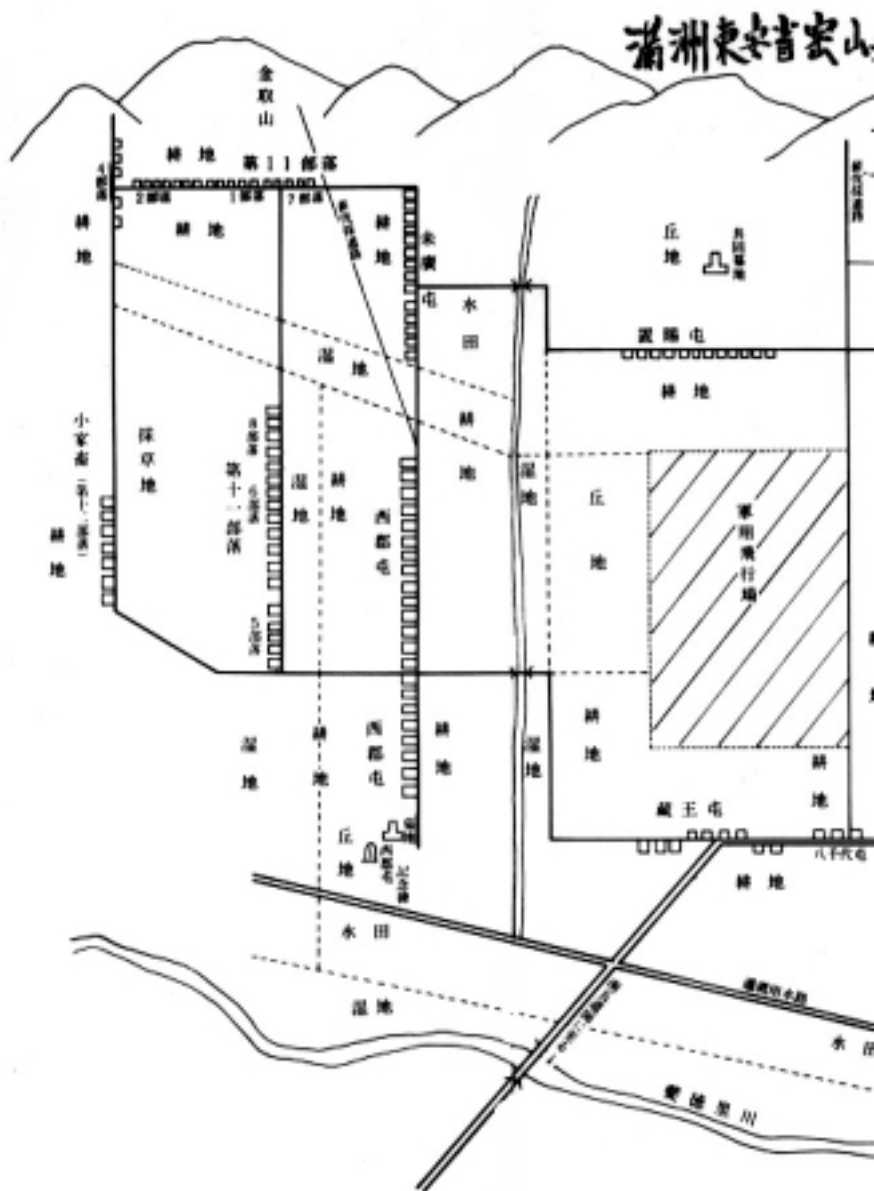
多田 利吉(班長) 武田 豊治

設楽 作次郎 川口 重雄

高橋 久雄 酒井 惣三郎

縣山形村開拓圖貼圖





阿部 幸一

長谷部 昭

高橋 三郎

田中 升之助

山口 清吉

加藤 重三郎

伊藤 芳弥

高橋 三郎

運搬班

山口 惣吉(班長)

玄地 惣三郎

吉田 惣七

伐採班

船山 菊之助

鈴木 円次

本部勤務

高橋 孫三郎

川口 政之助(斐徳出張所)

部落長

柏倉 源四郎

畜舎係

増川 太吉

柏倉 正(助手)

移植日本馬 二〇頭

満馬・牛 一〇頭

炊事係は婦人四・五名で交代制、残余は農耕。共同経営中の賃金配分は戸数割。従って大家族の人は赤字です。我が家は分家であったため、手持資金はゼロで、財政的には苦しかったようです。

谷地町出身の増川太吉さんは、実に誠実な人だったので、父母が見込んだのでしよう、母の妹が嫁しています。

いろんなことを教わりました。

昭和十五年秋から、私は斐徳出張所に勤務します。所長・斎藤一夫氏、所員・川口政之助氏。任務は斐徳駅周辺に駐屯する、一宮部隊、松村部隊等四ヶ部隊、陸軍病院、将校官舎への物資納入、駅への資材受積出し、郵便電報業務等。

北五道崗の農畜物は、この部隊によつて消費されたようです。毎日のように部隊に納入に行きました。斎藤所長夫妻には、「正ちゃん、正ちゃん」と大変可愛いがられました。彼は浪曲節が大好きで、広沢虎造の「国定忠治の唐丸破り」が忘れられません。

彼はソ連侵攻の折り戦死されると聞いています。忘れられない恩人の一人です。妹ま

さ子も釜範軍医中尉の所へ住込みで働きに出ています。

昭和十七年春、待望の個人経営に入りました。斐徳勤務の川口氏の田畑を委任され、畑十町歩、水田一町二反の大規模農業です。

まず、耕馬を日本馬二頭にする(耕馬の良し悪しによって効率が倍加)

耕作法を在来農法を北海道農法にする

畜舎の造営

乳牛、蜜蜂の導入、等

北五道崗の先陣を切りました。不足していた資金の調達は、父の生家成安から借り入れたようでした。

北海道農法とは、秋の凍結前に12吋プラウにて耕起、春四月末、表面解氷を待つて畦立機で三畦同時畦立て播種する。覆土は方形八口ーまたは柴八口ウで覆土する。生育期間はカルチベータにて、中間除草、漬培土する、以上が概要です。

人類末踏の処女地で肥沃、農作物は無肥料で最高の収穫だったようです。トウモロコシ等は、一晩に三十糎も伸びたことを覚えています。四季を通じて百花爛漫、特に野生動物の猪、ノ口(野鹿)、七面鳥、ガン、鴨、雉等動物の宝庫でした。武装移民な

ので、各自三八歩兵銃携行し、他に父が狩猟が好きなために、猟銃一丁を持っていました。これらの肉類と牛乳、蜂蜜、それに豊富な川魚料理。母は作業は一切やらさず、炊事係です。

最高の食道楽と最高の経営者になった父母の笑顔を忘れることができません。昭和十八年春、東安省より篤農家の表彰を受けます。これは農耕指導員の片貝喜市氏の推薦により、畜産部門が吉田完治氏、耕種部門が我が家だったようです。

この時ばかりは、飲めない酒なのに片貝氏を囲んで祝盃をあげました。得意満面の父の涙を見たのは始めてのことでした。

昭和十七年、建設はほぼ完了しました。

村長 熊谷 伊三郎 永井 伊勢治 指導員

安藤 勝 指導員 片貝 喜市 農耕指導員

秋田 民三 指導員

国民学校教員

山本 光二 校長 中田 久弥 夫妻

山崎 教員 佐藤 教員 森 教員

東本願寺 木下 時春 僧侶

施設

製材所、購買所、郵便所、農産加工所
醸造工場、病院、蹄鉄鍛冶

女子義勇軍開設

村地内に関東軍の飛行場が建設され、耕地不足となったため、八地区へ四〇数名進出

小学校

生徒数百十二名。子供達は通学不可のため寮生活。土曜日には洗濯物を山ほど抱えて帰宅し、母にあまえ、月曜日にはまたお別れ。でも皆んな元気でした。

青年学校開設

男女合わせて二十名位。教師は小学校の先生方。軍事教練は在郷軍人・塩田源之助上等兵が毎週土曜日の午後から行っていました。この頃の年代になると異性に対する淡い恋心があったのでしょうか。どんなに忙しい時節でも、せっせと通ったものです。生活物資も割合に豊富であり、戦時中ながら、私たちの青春時代は、最も充実した時代といえるでしょう。

開田稲作

昭和十六年頃の食料事情は配給制度で、稲作が永年の夢でした。幸いに末広川は水量豊富だったので、一戸当り六反歩開田。北海道から種子を取り寄せ稲作を始めました。最初は散種の直播き。次第に点播に移行したようです。除草方法は十糶位伸びた頃、吠を引き廻してなびかせると、稲だけが立ち上がるという方法です。

用材燃料の切り出し

十月に入ると穀物の脱穀作業、十一月末頃から燃料の切り出しに入ります。父と二人で一台の馬櫓で一日二回の作業。一寸忙しかったけど山が近いので可能だったようです。時々、狼が出たので軍銃携行です。駐屯部隊に納入しました。春になると毎年のように山火事があります。南斜面が雪が消えるので火事によって森林も焼け、北斜面だけが森林があったようです。

木炭運搬

個人経営になると、それぞれの特技によって、職業も変わってきます。狩猟専門が柏倉幸雄氏、酒井惣三郎氏。木炭焼きが船山菊之助、長谷部昭氏。この二人は炭焼きの専門家で、石釜を築き白炭を生産しました。私は生産された白炭を三日おきに斐徳出張所へ運搬しました。片道二〇軒の道なので、帰りは二見峠で暗くなります。送り狼に二度ばかり会いました。馬車の後からついて来るのです。運賃は一回十円位だったと思います。

野鹿(のろ)撃ち

増川氏とは時々狩猟に行きました。離れ耕地の灌木の中に雄鹿発見。軍銃を構える。距離五〇米。引鉄を引く、「ギャン」と一声高く声をあげ、二米位飛び上がりました。「ヤッター」銃を放り投げ走り寄ると、もう一頭の雌鹿が雄鹿の廻りをぐるぐる廻わっています。しまった！銃を放り投げてきたので、もう一頭を仕留めることができず残念。重量十貫匁。二人で担いで凱旋です。

魚取り

部落の前を流れる末広川は魚の宝庫でした。ドジョウ、フナ、ロートルイ(ハゼの一種)は、人間の怖さを知らず、一時間でバケツ一杯。斐德里川の魚釣りは天下一品。目の下一尺のフナが一時間で三〇匹。ただ、骨が硬いのが難点です。

雉獲り

雉獲りで一番勇壮なのは、斐徳駐屯部隊の狩りです。一ヶ中隊が車に分乗してやつ

てきます。三〇糶位に積雪した一つの沢を一ヶ中隊で囲み雉を追い立てると、いったん飛び立った雉が五百米位で降下して、雪の中へ頭だけ突っこむやつを手掴みするのです。重量があるので遠くまで飛べなかつたようです。何十羽も収獲して引揚げていきました。父も狩猟が好きで、野鹿、雉、ガン、七面鳥等、食べるのに事欠きませんでした。

狼の群れ

春になると夜間に狼の遠吠えが聞かれます。その数、何十頭の大合唱です。満州狼の頭数はかなの数だったのでしょう。家でも豚三頭やられ、牛も尻を食いちぎられたこともありました。山の中で猪の親子にも出合いました。逃げるのがとても早く、捕ることはできませんでした。

赤大根収獲

満州の大根は赤カブ大根です。冬期間の貯蔵に適していたようです。一町歩の大根

収獲は大変でした。毎日、馬車二台で本部まで運搬しました。一週間位かかったでしょうが。その頃になると、ようやく我が家の営農も軌道に乗ってきたようです。

現地入隊

昭和十八年に入ると、南方戦線の米軍は、反攻の歩を進めつつありました。五月十二日、アツツ島山崎部隊が壮烈な玉砕。十九年にはサイパン、グアム島、マリアナ諸島を失陥。重大な危局を迎えつつありました。

私の現地入隊は、以上のような厳しい戦局の、昭和十九年十月初旬。松花江の対岸、富錦に駐屯する二二三部隊に入隊します。私には力強い弟二人がいるので、後顧の憂いなし。部隊は違いますが、同期の白田芳夫君、柳田宗男君も同時期でした。部落総出で壮行会をやってくれました。目にいっぱい涙で、じっと見つめる母の顔が忘れられません。これが親子最後の別れになるうとは……。

「帰らじとかねて思えば梓」

なき数に入る名をぞ留むる」

正行の心境そのままに、勇躍出征することができました。東安の兵站部にはすでに現地部隊より新兵受取りの主任官、鷲尾軍曹。以下、三浦兵長、河野上等兵で、以後半年間一期検閲まで私達初年兵の教育係となります。

出発の朝、鷲尾軍曹の第一問「これより豊錦に向って出発する。出発に際して、最も重要な事を戦陣訓で戒めているが、答えられる者は」。七十名の初年兵で、これに答えられるものは私一人だけでした。「発つ鳥後を濁さずと言えり、雄々しく床しき皇軍の名を永く異郷の地に届むべきなり」。青年学校在学中に戦陣訓の暗誦ができたのが幸いしたようでした。

教官は小出少尉、班長は鷲尾軍曹、助手三浦兵長、河野上等兵。いずれも四年兵でした。基礎訓練の後、野外訓練。特に、対ソ戦術が主で、対戦車の破甲爆雷(人間爆雷)の特訓です。やはり競争意識が強く、民間社会以上だったようです。それでも開拓団出身者はいずれも優秀で、半年の訓練の後、一派検閲も無事終り、一選抜の一年兵昇格の発令あり七〇名の初年兵の内、十二名の選出で、私は第三位でした。訓練後半

に編成替えあり、摘弾筒手に編成されました。

ここで当時の南方方面の戦況と日ソ戦力を比較する必要があります。

(以下の記述は、瀬島龍三氏「回想録幾山河」より抜粋した。氏は、日米開戦時、大本営参謀を経て、昭和二十年七月、関東軍総司令部参謀に赴任)

南方方面の主戦場は、米軍の反攻が著しく、十八年後半から太平洋方面の主戦場に重点を置く大本営は在満関東軍精鋭兵団、作戦資材、航空機を南方に大量転出しました。昭和十九年には十一個師団、一ヶ旅団、一ヶ戦車師団。二十年には七ヶ師団、一ヶ戦車師団等、総戦力の半分以上が抽出転用されました。

その後、対ソ防衛の重要性から在満現地人根刮ぎ動員によって二十四ヶ師団、兵員七十五万の体勢になりましたが、その大部分は補充兵であり、実質戦力は二分の一分から三分の一と見なされていました。

対するソ連の戦力は、五月にドイツが降伏したためシベリア鉄道にて戦力を極東に送り、戦力が増大しました。八月には、兵員総計百三十万(狙撃師団五〇)、飛行機五十二師団(五千機)、戦車三十旅団(三千輛)、以上の戦力を比較した関東軍は持久戦、守勢作戦に変更せざるを得ず、満州東南部山岳地の持久戦構成になります。ちなみ

に、北五道崗の団員は二十年五月と七月に根刮ぎ動員、二百七〇名の内、二百三十五名の応召者を出しました。

昭和二十年五月、我が二二三部隊も南下の命令あり、豆満江の対岸リヤ洞にて陣地構築に入りました。私達は作戦の細部は知りませんが、朝鮮対岸の陣地構築は持久戦構想に合致するようです。

ソ連進攻

日本の降伏は、もはや時間の問題と見てとったスターリンは、急ぎ満州へ進攻し、戦果の既成事実を作らなければならぬと、かくて八月九日の進攻が開始されます。絶対的優位を誇るソ連軍は、戦車を先頭に関東軍を蹂躪（じゅうりん）。

かくて開拓民の逃避行が始まります。この惨状は、弟柏倉正著「嵐の中」に詳細に描かれています。

開拓団の配置は、主に満州東部虎頭を中心に、東安省、三江省、牡丹江省、北部

の黒河、ハルピンが居住地地点でした。従って、私達の住む東部は沿海州に集結した極東方面軍の矢面でした。しかも、根刮ぎ動員によって開拓団は、老人と婦女子のみです。結果的には、大本営は関東軍を捨てました。関東軍は、それならばと、開拓民を見捨てたのです。関東軍の指令官は、同時に満州国長官でもあり、それ故に、開拓民は関東軍を信頼せしも裏切られ、王道楽土の夢は、まぼろしの如く消え去ったのです。

満州開拓とは何か 私の考察

前にも書いた通り、日口戦争以来、満州における緊迫は、以然として続いていたはずです。このような地域の、しかも最前線に、満州国の育成、王道楽土の美名のもと、三十万の開拓民を投入する計画そのものが、日本民族の生贄（いけにえ）的な性格ではなかったものでないでしょうか。

農民は一般居留民とは異にします。全財産を投入し、大地に根を張ったものでなければならず、従って、関東軍の比護（ひご）が絶対条件のはずでした。

二ツ目は、何故に関東軍は開拓民を見捨てたのか。勿論、劣勢下における軍は、開拓民までは手がまわらなかったという大義名分はあるでしょう。しかし、十九年末頃

には、攻勢計画を断念し、南満の山岳地帯の守勢防衛が作成された時点において、開拓民を救済する方法はなかったのでしょうか。

しかも、関東軍総司令官・山田乙三大将以下、幕僚達はソ連の参戦早々、新京から通化へ逃げ出したのです。後に、満州各地から生命からがら帰国した人々は、この事実を知り、唇を震わせて怒ったといえます。何十万という犠牲者を出しながら、彼等護導者は、その後十一年の抑留後、帰国しています。

司馬遼太郎氏は言う「他人の領土を併合して、いたずらに勢力の拡大をはかったその総決算が満州の大瓦解であった」と。

シベリア抑留

不幸中の幸いともいおうか、せめてもの救いは、直接、戦闘に加わらなかつたことです。リヤ洞において武装解除の後、簡島に集結した私達は、当初「ダモイトウキョウ」（東京へ帰る）を合言葉にしていました。しかし、貨車に乗ったのが最後、北へ北へと進み、待っていたのは重労働と飢えと寒さの苦難の長い歲月であろうとは。

八バロウスクの北コムソモリスクの第二十三分所、三〇〇名の集団重労働が始まります。大隊長佐山中尉、伐採班、運搬班、積込班の三班で、私は伐採班でした。樫の木、カラマツ、白樺の大木、直径五〇〜六〇㎝の大密林です。ノルマ制で、二人組で長さ一・二米の鋸で切り倒し、長さ五米に採断し、枝葉は燃やします。

食料はモロコシ三〇〇グラム、黒パン三〇〇グラム、塩鱒少々と煙草三本位。百五十グラムの雑炊では、腹いっぱいにはならず、昼食の黒パンも、朝に食べてしまい、昼食には夏は野草、蛙等、食べられるものは何でも口にしました。冬になれば、古木のコケ類を焼いて食う。皆んな栄養失調の亡者です。夜中には、空腹の余り水を飲む他はありません。そして、孤独のつらさ。何の希望もなく、理性もない、生きる屍と化していきました。

人間の真の価値とは何であるか。軍隊における階級や企業の階級等は、組織の運営に過ぎず、極限の状態においては、人間の本質を現わす醜いものであることを見せつけられたのです。

私の戦友は宮崎県出身の甲斐民夫君。満鉄より入隊した初年兵で、お互いに身の上話を語り、そして、日本へ帰ることと、白い御飯に納豆をかけて食べたい。望みはただそれだけの単純さでした。

班内の戦友も次々に栄養不良のために死んでいきました。抑留者六〇万の内、死亡者は六万とも七万とも言われています。常に、ソ連の権力下であり、明日の運命がど

うなるのかもわかりません。毎日が腹ペコで満されたことはほとんどありません。季節の気候も、一年のうち気にならないのは春と秋だけで、特に冬の寒気は厳しく、零下三〇〜四〇度にもなりました。

その上、民主運動なるものが始まり、仲間内でも言動が制約され、他人を信じることさえできなくなってきました。社会主義（共産主義）とは、階級社会（富者と貧者）を破壊して、人間平等の社会をつくるうとする人道的発想といわれています。そして、生産手段の個人所有を廃して、国有、公有にしようという方法です。

私有を廃した結果、全人民は工場労働者と化し、各人は国家が課すノルマのために労働することになります。そのために労働者はノルマをごまかすことに努め、生産は低下します。私はコルホーズやソホーズにおいて、この実態を見せつけられました。農民はわずかの自家菜園ではみごとに作物だったのに、共同耕作地では、段違いの不作というありさまでした。そして次第に権力階級と、支配される大衆階級が生まれたといえます。私のラーゲルは、民主運動が比較的に低調だったので、その点助かったのですが、壁新聞等を発行し、言論は制約されました。

いま思い出しても、二年間の毎日は、精神的にも肉体的にも忍耐の連続でした。反面、またと得がたい試練の期間だったとも思っています。その後どんな困難や逆境にあっても克服できる自信を持つことができたことは、得がたい体験だと思っています。

六〇万人にもおよぶ不法抑留は、国際的にも、道義的にも断じて許されるものではありません。

満州におけるソ連の戦利品

一週間の進攻によって得たソ連の戦利品は莫大なものであったといえます。六〇万にもおよぶ人的労働力、南満州鉄道の財産約五〇億円、日本政府が満州に持つていった資産が二十二億円、満州重工業や在満法人のものが総計約二百六十億円、個人の財産の推計が五十八億円、合計すると四百億円と算定されるといいます。今の価値に換算すると何兆円、いや何十兆円にもなるでしょう。ありとあらゆるものを持ち去ったのです。スターリンの対日参戦の目的は、日ロ戦争の汚名を晴らし、南樺太と千島列島を奪回することにあつたのです。

祖国の土

二年間におよぶ過酷な重労働に堪えられたのは、祖国の土を踏む一念に他なりません。昭和二十二年八月二十九日、ナホトカの岸壁にマスト高く日の丸を迎ぎ見たとき、目頭が熱くなりました。

「私に祖国あり。今こそ、母なる国に帰れる」

私の人生で、これほど感動したことはありません。

船が岸壁を離れてから、有志一同、甲板に集合し、日章旗を以て「君が代」を斉唱しました。そして、シベリアの荒土に散った幾多の戦友達に黙禱を捧げたのです。

汽車の窓から月山の霊峰を迎き見たとき「国破れて山河あり」の思いはひとしおでした。

郷里の漆山には、兄が迎えに来ていました。

そして、父母が奉天で死亡したことを聞きました。

愕然として、返す言葉がありませんでした。かねてより覚悟はしていたものの、現

実の問題として信じていることができないのも無理がありません。すでに前年六月に弟妹達が帰国していたのが、せめてもの救いでした。

聞けば四〇日間にもおよぶ逃避行の末、たどり着いた奉天において、体内の全エネルギーを消耗し盡くした父母は、悠久の眠りについたのです。

過酷な条件において、幼い子供達を残しての決別は、さぞ心残りであつたらう。しかしながら、その短い生涯において、己れの信じてる道に突き進んだ父の勇氣こそ、天晴れといわなければならぬ。

「目をとじれば瞼にふるるものあり

生命のごとき温かきもの」

私達は己れを捨てて、我が子の幸を願った父母の慈愛を忘れてはなるまい。

戦後の食料、物資の不足する中であつて、六人にも引揚者を抱えた兄は、さぞ動揺したことでしょう。特に、姉上は嫌な顔ひとつせず、私達を愛で包んでくれたこの高恩を、決して忘れることはできません。

利根の開拓

敗戦によって被った受難は、我が国有史以来の屈辱だったはずですが、働くに職なく、食べるのに事欠く国民等しく飢餓の時代で、竹の子生活を強いられたのもこの頃です。丸裸で引揚げてきた私達は、途方にくれたのも無理もありません。兄が快く受入れてくれたものの、明日の糧を得なければなりません。

幸いに全日本開拓者連盟会長田中孫平先生、山形自興会長三沢先生、地元秋谷先生方のご尽力で、我孫子遊水池の開拓計画が浮上しました。私達北五道崗出身者がこれに参画することになりました。

当時の職業難、とりわけ抑留生活を通じて、食こそ第一義と体験した私は、勇躍この事業に飛び込んだのです。

昭和二十三年四月半ばのことでした。

我孫子遊水池とは、面積千二百町歩、利根川増水時における調水池で、地元民の点々と耕作地の他は、一面の葦野原でした。当初は共同経営で、道路を作り、排水路を掘り、宿舎の手当てをします。そして、開墾作業。当時は重機等はなく、一エンピ一エンピの開墾です。同志三十二名、一戸当り二町歩。朝に月をいただき、夕に星を見て

帰るといふ生活です。作業は厳しかったのですが、将来の夢がありました。

逐次、水田を起こし、それなりの収穫はありましたが、度々の水害に見舞われ、賃取の出稼ぎや援農によって生活を立てざるを得ませんでした。いまにして思うに、同志一同、よくこの苦難に堪えられたと思います。皆んなシベリア帰りの勇者だったのです。

「踏まれても根強く忍べ福寿草

春来りなば花は咲くらん」

私の家内鈴子は、前述の本間三代次氏の三女です。奇しき因縁に結ばれていたのでしょう。彼女は昭和四十四年五月、高血圧のため他界しました。苦勞の連続で、不憫でなりません。

この頃より、県営補場事業に着手、農機具も大農機を導入し、逐次、自立の目処がついてきました。日本の食料事情も大きく変わってきました。いわゆる米余り現象です。反当りの収量は増大して食料事情は好転する一方、外米の攻勢等による米価の値下げと、農家を圧迫してきます。

ちなみに昭和三十年以前における日本の食事情はどんな状態だったのでしょうか。日常、白米を食べるのは地主あるいは特権階級のみで、一般庶民は麦飯の一汁一菜。今の人達には想像もつかない粗食だったのです。長岡藩家老長岡佐渡は、桜御飯が大好物であったといえます。これは紅を入れた大根漬を小さく切り、これを入れたませ

御飯です。家老にしてこの粗食であり、一般庶民は押して知るべしです。

農業を取りまく情勢は大きく変わりましたが、環境問題、風光、治山、治水、いずれを取り上げて、農業を疎にするなら将来、取返しのない事態になることでしよう。確かに、農業は魅力のある産業とはいえません。しかし、私には大陸で大きな夢を抱いた父の遺業を引き継ぐ使命感がありました。土を愛し、土に生きた人生を誇りに思います。

我孫子に移り住んで五十二年、二世達もそれぞれの分野で活躍しています。我が家も末娘に養子を迎え、家族七名、後顧の憂いなく幸せな家庭を築いています。

振り振ってみると幼少の思い出、満州開拓の青年期、シベリア抑留、そして、利根の開拓と変転極まりない人生は、感無量という他はありません。

母の思い出

母は部落の中でも、名代のしっかり者だったようです。赤貧洗うが如しの中でも、大勢の子供達の服装はつきはぎの着物ながら、恥ずかしい思いをしたことがありませんでした。暇さえあればつくろいものや洗濯と、一寸の時間も休むことがありませんでした。学校も子守りをしながらの授業で、それでも首席を通したと聞いています。躰も厳しく、子供達は下手な手抜きはできません。当時の冬仕事の内職は、農家の収入源として、節草履（ふしぞうり）作りが営まれていましたが、母はこれが得意で、私も夜なべに節切りを手伝わされました。

胸を張って、自慢できる母を持ったことを誇りに思います。

余生を生きる

「有為の新進次々と逝き 無為の老骨一人 生を楽しむ」

団員三十二名のうち、十九名の同志を亡ったことは雑念の極みです。幸いにして、女性の方は皆んな元気です。満州開拓と逃避行、そして、再度の開拓の鍬をふるう。正に悪戦苦闘の連続でした。彼女達の残された晩年を、いかに心豊かに生涯を送るか、今後の課題ではないでしょうか。

先輩達が老人クラブを結成してくれました。

「嬉しい時には共に喜び合おう。悲しい時には、慰め合おう」

同じ境遇に生き延びた者同志だから。

「我がママが 少しなほりしと妻が言う」

老クを統べて六年となる」

(妻ヒサ子と二十八年)

「刻みたる この年齢は何ならん

余命と言わず 残る生命を」

忘れ得ぬ人々

兄、柏倉二郎

私が小学校の頃、兄は東京へ出て働いていました。当時「少年倶楽部」という月刊誌を毎月送ってくれたのです。田川水泡の「のらくろ」、山中峰太郎の「敵中横断三百里」、高垣瞳着「快傑黒頭巾」等、毎月が待遠しくて読んだものです。付録等もいろいろついていたようです。当時、月刊誌を取る人は地主の子弟のみで、嬉しかったことが忘れられません。

斎藤省司先生

小学校六年、高小一・二年在学中の担任の先生です。習字が上手な先生で、三年間も習わると字はもろろん性格まで先生にそっくりになるようです。シベリアから帰ってきたとき、大変喜んでくれました。文通していたのですが、昨年亡くなられました。

田中孫平先生

在満当時、開拓総局長を勤められた折に、北五道崗に視察に見えられました。実績と県民性を高く評価されたのでしよう。我孫子入植者選考の折りに、第一に推薦していただきました。部落の名付け親でもあられます。

日新とは 湯（とう）の名臣 伊尹（いいん）の作にして

苟 日新 苟（まこと）に、日に新たなり

日 日新 日々、新たなり

又 日新 又、日に新たなり

引用されたとか。日新部落の生みの親といえるでしょう。

秋谷好治先生

我孫子入植当時、町長、利根改良区理事を歴任され、高廉潔白な方でした。他県人を排斥することなく、何彼と御配慮いただきました。忘れ得ぬ恩人です。

斎藤一夫夫妻

私が少年の頃の斐徳出張所長で、子供がなく、我が子のように可愛がっていただきました。奥さんだけ帰国されると聞き、いろいろ伝手を求めて尋ねあて、お便りを出した時には亡くなられた後でした。一言、お礼を申し上げたかったのに、残念でなりません。

私の兄弟

私の兄弟は仲がよい、これまで毎年、兄弟会なるものをやってきました。集合地は、湯ヶ原温泉二回、箱根温泉、北海道一周旅行、上の山温泉、肘折温泉、秋保温泉、鳴子温泉など、総員十二名の大部隊の旅でした。

長女・まさ子

遠藤義巳へ嫁す。山形市在住。性格は母親に似て、しっかり者。夫君は聡明。晴耕雨読。悠悠自適の生活を送る。親思いの子供運に恵まれる。

二女・ゆり子

高橋正司氏へ嫁す。北海道在住。母親に似る。大規模山林育苗出荷業の独占企業を
経営する。目下引退して、悠々自適の生活。

三女・綾子

池田守氏へ嫁す。鎌倉市在住。性格は父親に似る。夫君は日本曹達の営業課長を
経て退職。性格淡泊にして読書家。鎌倉は日本一住みよい所だ。

三男・正

座間市在住。性格は父親に似る。少々、我がままだが、私とは一番馬が合う。二人
で映画、観劇に時々出かける。昨秋には、二人で念願の京都寺社廻りに挑戦した。五
泊六日の行程で、十八ヶ所の寺院廻りは、さすがに体力の限界を知る。丁度、紅葉の
見頃であったため、最高の思い出となった。

自ずから身の引締る心地すれ

生命たしかむ 叡山のみち

大部迷惑をかけてしまった。妻君に恵まれる。

旅行と読書、マージャンに明り暮れている。弟妹達は引揚げ以来、精神的にも経済的にも苦難の道だったに違いない。

私は、長男として生まれながら、何の援助もなし得なかったことに対して懺悔（ざんげ）の念に堪えない。今日の幸いは、各自の努力もさることながら、亡き父母の御加護の賜であることを忘れてはなるまい。

おわりに

七十五年をふり返って、破乱に墓んだ人生を、よくここまで健康で来たものだと思う。ひとえに神様の御加護、亡き父母の導びき、そして、先輩や友人達の大きな支えがあったことを心から感謝している。

ここに亡き父母の墓前に鎮魂の祈りを込めて

この賦を捧ぐ

合掌

平成十一年三月

出版に際しては、従兄弟に当る柏倉利明君の協力をいただきました。

彼の母上。松代さんは、私の母の妹で書道の大家、かつて書道塾を経営せしも、

八十七才の高齢にて、目下療養中なるも至極元気です。厚くお礼を申しあげます。

「鎮魂の賦」の重なり

従兄弟といっても、私にとっては叔父さんといってよいほどの方、柏倉正二さんの「鎮魂の賦」を読ませていただき、しばらくは何もできませんでした。熱く重いものがずっしりとのしかかり、何ともいいようもない悔しさと憤りと悲しさの中で、私はこの手記から、何を学ぶべきなのかを考え続けました。これを読んだ私たちは、次の世代にどんなことを残し、何を伝えるべきなのでしょう。

柏倉源四郎、イシの二両親が亡くなった年齢を超えた私です。そして、我が家の場合も子供達は成人しいまという時代を、何も危惧し憂うことなく生活しているようです。もちろん、彼らをはじめ、彼らと同じ世代の若者達に悩みがないとはいいません。ひよっとしたら、私たちがあの頃、一様に味わったものとは違う質の、もっと深い悩みや苦しみをもっているのかもしれない。でも、理不尽にも、外から生死を一方的に与えられるような、生命や人間性の根源にかかわるような苦しみは体験していません。すずしく、させてこなかったという自負があります。

そんなものは体験しないでいいに決っています。親として、子らに孫たちに、いや、すべての次世代の若い人たちに、絶対にあわせたくはありません。そのために、戦争はいけない、平和な世界をつくらう、といった着地点を見つけ納得してしまうのは容易でしょう。それは当然の帰着ですが、そのためにはどんなことをするのかです。人それぞれに、いろいろな方法があるでしょう。そして、私は

この手記を読んだ私たちは、何をしたらよいのでしょうか。

まず、この手記をじっくり読んで、重さを感じることでしょう。そして、子や孫たちに語りつぎたいと思います。できれば両親や祖父母の体験を直に聞いてください。また、正二さんのご兄弟の手記、柏倉二郎著「俺が人生八十年」と、柏倉正著「嵐の中」を併わせ読まれることをおすすめします。特に「嵐の中」は、満州からまさしく命がけで逃避してきた壮絶な体験が生々しく綴られています。

正二さんに繋がる人たち、そして、柏倉家に繋がる人たち、さらには、広く柏倉一族に関わる人たちは、まず、いまある自分の命の重さを知ってほしいと思います。そして、私を含めて、この自らの命に繋がる人たちに、心から感謝したいと思います。まさしくあなたのおかげで、いまを生きられているのです。やさしさといつくしみ、思いやりは、ここから始まるのではないのでしょうか。

それは正二さんが、ご両親の墓前に捧げる思いに繋がるはずです。

柏倉 利明（東京都多摩市在住）

表紙のイラストは「カシワ」です。

私の日立勤務時代の友人、絵本作家・長谷川道子さんの「万葉の花々」から転載させていただきました。

鎮魂の賦 回想録

発行 平成十一年三月二十一日

著者 柏倉 正二

千葉県我孫子市日新

電話 0471(82)8068

発行所 (株)クリエイティブスタッフ

東京都新宿区若葉1-8-4

電話 03(3353)6545